



与那原町史だより

与那原町教育委員会 生涯学習振興課 町史編纂室

TEL 098-871-9981 FAX 098-871-9982 所在地 〒901-1304 与那原町字東浜27番地



↑米軍払下げのコンセット校舎内での授業。黒板一枚をへだてた反対側では、別の学級が授業をしていたという。中学校の移転は1953(昭和28)年



← 昭和20年代頃の与那原中学校。カマボコ型のコンセット校舎を外から見た様子。写真2点とも町史編纂室所蔵

編纂室より

町史編集事業において現在取り組んでいる『資料編 戦後の与那原』は、発刊計画の折り返し点まで進んできました。引き続き、関連資料の収集や聞き取り調査などの成果を積み上げ、町民の皆様へより良い一巻をお届けできるよう努めていきます。今年度の調査、収集資料の一部をご紹介します。

みんな大好き！ アイスクーキ！！



(森下在住)にお話をうかがいました。

おいしさの秘密

井戸の水
を使おう
としたと
ころ、そ
のままの
品質では
保健所の
許可が下
りず、保
健所の助
言を得て

仲村さんは、一九四八年(昭和二十三)当時、現在のえびす通りで店を構え(のちのレストランいかさ)、レモン味、オレンジ味、小豆(あずき)味、ミルク味、ミルクチョコ味、アイスポンポン(風船の中にアイスを入れたもの)などのアイスクーキを販売していました。冷たい食べ物ほとんどなかったこの時代、子どもだけではなく大人にもアイスクーキは大人気で、夏の間は連日アイスクーキを買い求める客で大変賑わっていました。

氷菓子の不衛生多い

厚生局 近く管理指導乗り出す

厚生局はほど氷菓子、アイスケーキ、アイスクリムなどの衛生検査を行ったが、その結果、だまが不衛生な菓子が多いとして、近く衛生管理の指導に乗り出す。この日の氷菓子などの衛生検査は、八月と七月の二カ月に行なわれて、検査数は計三千七件のうち合格したのは九十一件、合格率は六六%。検査は大阪府や一般朝陽が、七六%が合格、ユサ保健所は七〇%、石川保健所は四四%、名瀬保健所は四〇%の合格。地といたきしい衛生指導が厳格なことで、合格率は五四・一%、約半分以上が食品としては未達格だといふ。全般的な衛生指導は、一三年前よりはよくなっているが、同屋では不衛生業者については指導を強化し、近く再検査する。再検査でも不合格した場合は営業停止処分にする考え。

水質の問題が取り上げられた新聞記事
『琉球新報』1964年8月7日 朝刊7面(琉球新報社提供)

与那原は、記録によると戦後間もないころから様々な業種が商店街に軒を並べ、その中に製菓業が十一件あったと記されています。このことから貿易や交通の要衝だった与那原がいかに商業地として賑やかだったかということがうかがえます。

製菓の中でも、アイスクーキは昔も今もみんなの大好きな氷菓子の一つです。そこで、戦後すぐアイスクーキ屋を営んでいた仲村常善さん(港区在住)と、お母様がアイスクーキの行商を営んでいたという眞榮平實さん

仲村さんによるとアイスクーキを作る際は、水を使うのに大変神経を使ったそうです。まず、アイスクーキの原料となる水に

井戸の水
を使おう
としたと
ころ、そ
のままの
品質では
保健所の
許可が下
りず、保
健所の助
言を得て

ろ過装置を手作りで作製し、水を沸かして作ったということ。衛生管理の概念があまり浸透していなかった時代に、仲村さんは、衛生的でおいしいアイスクーキを販売していました。

やがて、店での販売だけではなく、行商にアイスクーキを卸すようになりました。行商へは一個五円(B円)で、チョコレト味は七円で卸していました。(当時沖縄そばが一杯二十〜二十五円)行商たちは商品を詰め

たアイスクーキ箱(木箱)を自
転車の荷台や頭に載せて、西原
や佐敷、知念あたりの近隣町村
への販売もしていたそうです。
通常七、八人の行商もハリー、
ユツカヌヒ、綱曳などの行事
になると二十人ほどに増え、大
繁盛だったとのこと。



沖繩初の総合遊園地 与那原テック

一九六六年（昭和四十一年）八月七日、「科学が生んだオトギの国 総合自動車遊園地」をキャッチコピーに（株）沖繩テックニランドが運営し、通称「与那原テック」という名で沖繩初の総合遊園地がオープンしました。



『琉球新報』1966年8月7日 朝刊8面（琉球新報社提供）

今回、当時の新聞記事をもとに建設から開園、復帰のころまでの様子を紹介します。

遊園地 建設！

一九六〇年代、与那原町は観光地化を目指し、海水浴場の整備や軍道（現在の国道）沿いの緑化計画などを進めていました。その中、青少年の健全娯楽施設として那覇近郊の実業家たちを中心に遊園地建設計画が立てられました。

面積は江口区の雨乞い森一帯約四万坪という広大な敷地でした。総工費は二十五万ドル。一九六五年（昭和四十一年）十一月に起工式が行われ、ホンダモーター社の協力により建設が行われていきます。

建設途中の一九六六年（昭和四十一年）一月には、用地整備中に大型地雷三個、魚雷のようなもの、機関銃弾や大破したトラックの破片などが地中から出

てきたこともありました。爆弾処理、撤去は米軍処理部隊が行いました。

このようなことから予定の一九六六年（昭和四十一年）三月から大幅に遅れ同年八月に開園することになりました。

開園当日の様子

一九六六年（昭和四十一年）八月七日午前十時から開園式が行われ、一般公開は午後一時から行われました。この日の来園者数は約三千人と賑いました。

しかし、午後三時頃に子供用ぞうり列車が定員超過によって脱線する事故が起こり、十数名が重軽傷を負い、午後三時半には閉園する事態となりました。

この事故をきっかけに琉球政府は、遊園地に対する総合的な行政指導や監督をする担当課を明確にすること、遊園地建設の許認可、食堂経営などに関する法律の明確化を決定しました。

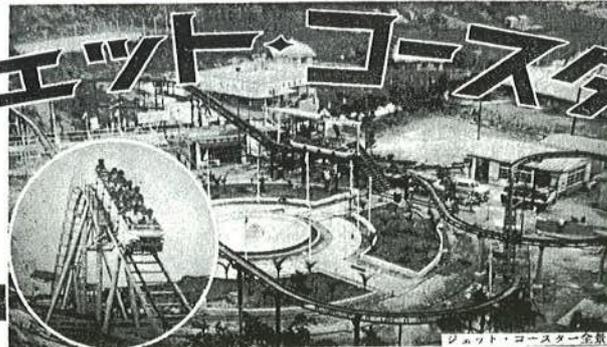


祝

ジェットコースター

開通

※おとぎの国
与那原テック
(095)2381



ジェットコースター全貌

ごあいさつ
 動物の種、飼育にはますますの高度のこととお喜び申しあげます。お庭を拝見して当テックも同様に作らなれば、このたびは総合自動車遊園地として施設の充実を祈すため、本誌もとより世界各国の遊園地で人気を集めている「ジェットコースター」を新設することになり、工事をおいでもりましたのはご承知のことです。目下から営業を開始しました。必ずや沖縄のレジャー文化の一翼を担えぬものと従員一同自覚しており、皆さま方のおいでの心を大切にしております。
 1969年11月9日

株式会社 沖繩テックニランド
 (与那原テック)
 取締役社長 徳野 隆夫

『琉球新報』1969年11月9日 朝刊8面（琉球新報社提供）

事故後、一週間は閉鎖され安全確認等が行われ、同年八月十七日に再開園されました。その後は多くの来場者が訪れる観光名所のひとつとなつていきます。

たくさん楽しい乗り物

開園当時の入園料は大人二十セント、子ども十セント（当時の沖縄そばは一杯二十〜二十五セント）でした。

乗車賃は、象列車、スポーツカー、ゴーカートは二十セント、フットカーは五セント、その他は十セントとなっていました。

《乗り物一例》

- ミニカー
- フットカー
- オートバイ
- ぞう列車
- 走るイス
- 観覧車



ロケットと観覧車
（『よなばる今・昔』より）

○義経号汽車

○ティーカップカー

○ベビーボートリング

○バスーカー砲

○ジェット・コースター

（一九六九年新設）

○淡水プール（一九七一年新設）

他にも園内には噴水や休憩所、中城湾が一望できる展望台に向かうケーブルカーや食堂などがあり一日中、楽しめる施設でした。

行楽地の代表・与那原テック

与那原テックは子どもたちの学校遠足の場として、また休日には家族連れが遠く国頭からも訪れるほどの人気スポットとなりました。こどもの日や夏休みなどは多くの来場者で賑った様子が当時の新聞で紹介されています。

町内の与那原テックは午前九時の開場と同時に子供連れの入場者が殺到、この日だけ

でのべ三万人という客でにぎわいを見せた。テック周辺の駐車場（二百五十台収容）は午前中ですでにいっぱい。町内の小路や沿道はにわかに駐車場に早変わりするほど。中には入場できずに引き返す客も多かった。

テック側では約八十人のアルバイト生を動員してサービに当たったが、続々詰めかける客をさばききれず、「この連休が一年のかせぎ時だが、予想以上の入りだ。開園以来の最高だ」とうれしい悲鳴を上げた。

げていた。

また与那原海岸の海水浴場ではテック帰りの海水浴客でにぎわった。ここでも子供連れが多く色とりどりの海水着を着てはしゃぎ回っていた。

（『琉球新報』一九六八年五月六日
朝刊七面より引用）

テレビの公開収録や盆踊り大会、のど自慢大会など各種イベントを行う場でもあった与那原テックは、一九八六年（昭和六十一年）に閉園、現在はマリントウゴルフ場となっています。

子供の日

行楽地に空前の人出

家族連れでくり出す



与那原には五万人も

マイカーが押しかける

『琉球新報』1968年5月6日 朝刊7面
（琉球新報社提供）



与那原の地籍問題

一九四五年（昭和二〇）八月終戦後、与那原のまちを米軍が占領しました。軍需物資集積所とするためにほとんどの土地はブルドーザーで均され、新しく造られた道路には滑走路用の銅鉄マットが敷かれました。こうして地形は大きく変容し、戦前の土地の境界が不明となったことで与那原の地籍問題が始まりました。

（土地境界不明地となった地域は、旧与那原の新島区、中島区、港区の一部）

基地解放・規格住宅の配給

一九四六年（昭和二十一）四月、米軍が引き揚げたことで与那原は開放され、終戦後に大見武区や近隣村へ移住していた住民が戻って来ました。

そして、沖縄民政府からの指示で区画整理が行われ、割り当

てられた土地に支給された規格住宅が建てられました。規格住宅は、区長を中心とした有志たちで初めに新島区へ九十四棟が建ち、翌年にかけて中島区、港区へ建てられました。

一九四六年（昭和二十一）二月付、戦後の混乱状況下に米国海軍軍政本部指令公布の「土地所有権認定事業」が実施されましたが、戦災によって土地関係の公図、公簿が焼失したため、

地籍等を正確に確認することは困難となり、所有者等の申告にもとづいて新しく地図作成が行われました。しかし、形状及び位置が不正確で完全なものではありませんでした。

地主会の結成

一九五七年（昭和三十二）十一月付に公布された「土地調査法」による地籍調査は、一九六〇年（昭和三十五）から始まり

ました。

一九七二年（昭和四十七）一月、役場に土地整理課が設けられ、同年七月に地主会が結成されました。二十ブロックに分けた地域の中から地主会の代表として代議員を選出し、多大な問題の解決に取り組みました。

一九七二年（昭和四十七）五月十五日「沖縄の日本復帰」以降も「国土調査法」にもとづく



まちの土地殆どが敷き均された（現在の新島区辺り）
撮影：1945年



碁盤状に区画整理された土地に規格住宅が建てられた。
撮影：1950年頃

【参考資料】

- ・「広報よなばる」1984年5月発行
- ・与那原町の行政資料
- ・関係者による聞き取り調査
- ・与那原町発行の町史及び写真集より写真掲載
- ・『与那原当添史』著者：仲里全良氏

地籍調査は継続されました。

割当て土地問題は、法律上解決されませんが、現地においては幾多の問題がありました。

「栗国与那原町長は屋良知事を訪ね、米軍が物資集積基地に使用していた旧与那原一帯を返還用地の地籍画定のモデル地区に指定し、同一帯の地籍画定を早急に実施するよう要請」

(一九七四年(昭和四九)十月)

沖縄県『行政記録』より)

位置境界明確化法の制定

一九七七年(昭和五十二)五月、「沖縄県の区域内における位置境界不明地域内の各筆の土地の位置境界の明確化等に関する特別措置法」公布され、与那原町では、町の土地を明確にするため調査を始めました。

地籍を正確に確認するには、与那原は小字があるため難航しましたが、できるだけ細分化し、住民一人一人説得していく集団

和解方式で作業を進めていきました。

一九七九年(昭和五十四)二月、境界不明地内に県国の現場事務所を設置し、本格的な作業に入った三年後には、地籍の明確化九十二%を達成しました。

新たな地図の作成では、米軍が撮影した上空写真から道路等の位置を確認し、土地の掘り起こしで発見した井戸や石垣の跡、所有者の申告などからほぼ完成しました。



掘り起し作業(道路側溝跡)

一九八二年(昭和五十七)三月に国土庁へ提出した明確化の公図、公簿は、翌月には総理大臣の認証が下り、同年十月から保証業務及び権利調整業務が実施されました。

土地問題が解決



土地問題解決祝賀会

沖縄県地主会の協力を得て、地籍問題は一部の地域を除きほぼ解決したことで、一九八四年(昭和五十九)五月、土地境界の奮闘は終了しました。

境界不明地の概要

明確化前	地主数	467
	筆数	707
明確化後	地主数	466
	筆数	2,906
権利調整を必要としている筆数		2,076
権利調整を必要としない筆数		831

各筆の明確化は95%、権利調整は90%達成
1984年(昭和59)3月現在

◎当添の区画整理

昭和二一年、部落内より大きな道路が開通し、宅地内の住家は全部焼かれ、石垣やその他の建造物は壊され、しきならされて境界も不明となっていた。

道路開通のため宅地を失ったのも在り、その方々にも宅地の割当てを与えるため、各戸に七〇坪あて一様に割当し、住宅地として線引した。

それから六年たち、昭和二六年生活も落付き、土地の値打ちもできるようになったので、区では宅地の境界を明確にする区画整理委員会を組織した。

旧図面も参考に測量して図面を作成した。戦後割当て線引した宅地の新図面をつくり、新旧図面を一つに別個に作成、これにより入込の状況を明確にした。

測量の期間は、昭和三二年九月より一二月まで三ヶ月間要し整理した。

『与那原町当添史』より)

学校の引越し

— 小学校と中学校 —

● 与那原小学校

戦前の小学校は、現在与那原大綱曳まつりの会場である御殿山青少年広場の辺りでした。

大正時代の第一大里尋常高等小学校分教場を経て、一九四一年（昭和十六）に与那原国民学校として開校したものの、一九四五年（昭和二十）には、空襲で町も学校も破壊されてしまいました。

一九四六年（昭和二十一年）、大見武の収容所で戦後の与那原の学校は始まったといわれます。

同年六月には、現浜田区の旧兵舎跡に与那原初等学校が設立されましたが、まだ何もない学校でした。当時の職員などが、電柱を切って柱にし、カヤぶき校舎を作った話が現在まで伝えられています。

● 与那原中学校

新学制の実施により一九四八年（昭和二十三）に、与那原中等学校が開校しました。当初、初等学校と同じ敷地内に併置され、学校長、教

頭も兼任でした。

当時の教員数は八人、生徒数は三十七人で、六学級でした。

校内東側と与那原区側のカマボコ型のコンセット校舎が教室だったといえます。

一九四九年（昭和二十四）、与那原は大里村から分離して町になりました。



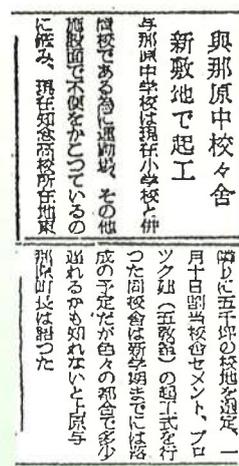
『うるま新報』
1951年4月3日 2面
(琉球新報社提供)

一九五一年（昭和二十六）に与那原中等学校は初等学校から独立し、翌一九五二年（昭和二十七）には移転の話がまとまりました。

同年二月に、知念高校が旧玉城村親慶原から与那原の現在地へ移転開校しており、中等学校は、隣接する広い原野を新敷地とすることになりました。

その四月、琉球教育法によって、学校名は初等学校が与那原小学校

へ、中等学校は与那原中学校へ改称されました。



『琉球新報』
一九五三年一月十三日二面 (琉球新報社提供)

一九五三年（昭和二十八）、新敷地で起工式があり、四月に移転しました。場所は現在の中学校です。コンセット校舎を解体し、資材として運ぶなど、生徒も共に作業にあたったといえます。十月には運動場が完成し、翌月、小学校も合同で移転祝賀運動会が開催されました。



新敷地で校舎づくりの作業
(与那原中学校提供)

● 与那原東小学校

町の発展とともに小学校の児童数は増加しました。一九七六年（昭和五十一）頃の与那原小は児童数一、三九四人、三十七学級の過密校で、解消のため、小学校の分離、新設が決まりました。

一九七九年（昭和五十四）、与那原東小学校が開校しました。当初は、与那原小の敷地内、西側のプレハブ校舎が教室でした。

校舎が完成したので、十月に全校あげて国道をパレードし、新校舎の建つ現敷地へ移転しました。

東小学校の引越しが落ち着いた頃、与那原は約四km²の面積に小中高校の収まる町でした。

三十余年経ち、今度は大学が引越してくる予定です。



与那原東小学校開校パレード
日光写真館前あたりを通過するところ
(町史編纂室所蔵)